重度知的障害のある人の自己選択を支援する方法の考察

—選択行動の形成とレパートリーの増加を通して—

柳　田　正　明

A study on the Method of choice-making assistance For Persons with Severe Intellectual Disabilities

—— Based on Shaping behavior of choice-making and Increasing choice-repertoire——

Masaaki YANAGIDA

Abstract: The purpose of this study was an attempting to shape behavior of choice-making and to make increasing choice-repertoire in setting of choice opportunities using their preference for two persons with Sever Intellectual Disabilities who were regarded to be difficult to make choice for themselves.

A following point became clear. Applied behavior analysis is useful as a method to facilitate Persons with Severe Intellectual Disabilities to make choice and to increase repertoire.

Key words: Severe Intellectual Disabilities, choice-making, applied behavior analysis, QOL

本研究では、「自己選択」をすることが困難と見られる重い知的障害のある人２名を対象に「好きなこと」による選択設定という環境からのアプローチによって選択行動を形成し、選択のレパートリーを増加させることを試みた。

これによって、「自己選択」が困難と見られる重度の知的障害者への具体的な「自己選択」の支援の方法には、応用行動分析の手法を用いることが有効であることが示唆された。

キーワード：重度知的障害者、選択行動、応用行動分析、ＱＯＬ

はじめに

重い知的障害のある人にとっての「自己選択」について、その重要性は謳われつつも、実践の方法を具体的に示した研究は稀少である。「選択が困難である」と周囲から判断されて、選択の機会がない状況、あるいは形式的か名目的な選択の設定がされ、目前に意味の理解が成り立っていない選択肢が提示されている状況、また環境を制限して自由の名目で行動を全面的あるいは過度に受容し、「自己選択を尊重している」といった状況では、「自己選択」がなされているとは言えない。また、環境の中に選択のレパートリーが用意されていても、体験して理解する機会がなけ

れば「自己選択」が保障された環境にあるとは言い難い。

『障害福祉の基礎用語』（日本愛護協会、1996）によると、1994年スウェーデン福祉法で「与えられた生活」から「選んだ生活」を知的障害者自身が実現化の当事者として位置付けられたことで、「自己決定」、「自己選択」の重要性が言われ出した。また、その援助の方法としては、「自己決定、自己選択を主体的に行使する学習と経験を反復できる援助を提供し、それによって自己実現を達成し体験した喜びと自信を育てることが重要である」とある。しかし、日本では、「自己決定」、「自己選択」のみ注目され、「主体的に行使する学習と経験を反復できる援助の提供」、およびそれを「喜びと自信」に結びつける方法の検討は充分であったとは言えない。

また、知的障害のある人を対象にした社会福祉援助技術（ソーシャルワーク）の研究は、希薄であったことが指摘されている（中野、1999）。理論的には、「ワーカビリティの欠如」と歴史的な「教育依存」のため、社会福祉学総体の中では非常に僅少な状況にある（北沢、1994）。

しかし、ノーマライゼーションの思想が生成し、ソーシャルワーク研究の課題として見直される中で、近接領域からの課題提起として、行動分析とノーマライゼーションの接点にある福祉実践の方法のパラダイムとして「行動福祉」（望月、1993）が注目されている（中野、1999）。

具体的な重い知的障害のある人を対象とした「選択」の研究は、むしろ応用行動分析学の分野で進展している。応用行動分析学の「選択行動」研究は、アメリカの専門誌Journal of applied behavior analysis（以下JABAと記載），Journal of the association for the severe handicaps（以下JASHと記載）などに多く見られる。1980年以降のJABAとJASHの関連論文（52）では、その要約から見ると複数の意図や手法が組み合わさっているが、目的に沿って本研究との関連で分類すると以下の4つに分けられる。1）選択による好みあるいは行動の強化子を同定するもの、2）選択による効果を同定するもの、3）選択行動そのものの形成、4）選択を形成することで問題行動の低減の手段とするもの。その中で「重度」の成人を対象にすることに意義を示したものは15あった。特に好みの同定を目的にした研究では、16のうち6が「重度」を対象者にしていた。また、日常の家事に選択の機会を設定していくもの（Bambara, Koger, Katzer & Davenport, 1995）や地域のレストランの利用スキルを獲得しながら、そこに選択の機会を入れ込んで行くもの（Cooper & Browder、1998）など日常や地域に即した研究が進展している。

それに比較すると、日本の先行研究は少ない。JABAやJASHに見られる選択が問題行動の低減につながることを検討したものは、ようやく1999年の行動分析学会で初めて1編発表された（織田と鵜飼、1999）。

日本では、施設内の活動や食事メニューの選択の研究（野崎・望月ら、1991；1993；1995）、家庭内の活動選択の指導（志賀、1994）、最重度障害児への選択行動の形成（槇田・藤田・井上、1994）などがある。

野崎・望月グループは、重度の成人女性を対象に、選択が困難と見られた対象者でも選択によって好みの表明が可能であることを証明した研究（1995）を、JASHにも発表している。また、対象者は同じ重度の成人女性で選択の方法を検討した上で、「好みを知ること」の意味を否定し、「選択の機会を保障すること」の方が重要であるとし、本人の属性として固定的好みを表明したものではなく、文脈で変化する行動であるとも述べている（野崎、1993）。

他に、現場での実践的な研究として、山根ら（1996）の、施設の集団生活の中で、中軽度の児童５名を対象に選択スキルを高める目的で実施されたものがある。より実生活に即した報告がなされているが、対象者のうち選択できないとされた人への方略が示されていない。

また、養護学校小学部1年を対象に、展示棚からの特定遊具を持ってくる選択行動の形成と二人で遊ぶ遊具の設定で他者との交流を可能にした実践研究の報告（岩田、1995）がある。この実践研究には、２つのコメント論文があり、選択行動研究の我が国と欧米との背景の違い、教育現場で実践する意義、今後の展開について示唆に富む内容を示し、選択行動の是非を的確にまとめたもの（加藤、1995）とより行動分析に立ち返って動物実験学の視点から、新奇で複雑な「遊び」には関心の強化子があることを指摘したもの（金子、1995）がある。

他に、重度の障害者を対象に、選択肢（アイテム）２・１を卓上で動かして注視の反応から選択行動を見ているもの（槇場・藤田・井上、1994）や視線と注視することで選択行動の形成を図るもの（鈴木と藤田、1998）がある。

こうした欧米と日本の「選択行動」研究の進展に格差がある理由として、加藤（1995）は、集団を前提にした中で個別的な対応がどれほどとれるかといった日本と個人を前提にした欧米の教育形態に違いがあるためと指摘している。

しかし、発達障害児を対象にした研究は要求言語行動の形成の研究と相俟って多数発表されてきているが、福祉の領域で、選択の機会があっても選択肢の意味の理解がなく選択が成立しなかったり、選択の機会が制限されてレパートリーの少ない状況にある重度の知的障害者を対象として選択行動を形成し、選択のレパートリーを増加させるための具体的な方法を示したものはない。

望月（1996）は、「選択」の定義として、『「選択」それ自体は極めて単純な方法であると言われている。「選択ができる」ということは、「対象者が与えられた選択肢のどちらか一方に偏った分化的な反応を示すことである。つまり選択行為とその結果を繰り返し経験する中で、特定の物を他方より多く選択するという結果が示されることである。』と述べている。この定義は、基本的で理解し易いと思われる。

また、選択行動に関わる介入は、「本人に向かって行なう「援助」と、本人の「選択」した行為成立のために本人とともに他者にアピールしたり要求したりする「援護」という作業に分かれる。」とも言われている（望月、1996）。いかに「援助」し、いかに「援護」の作業をするかの一連の研究があり、四半世紀にわたる「要求言語行動」から、「言語要求」としての「選択」(choice-making)が位置づけられ、いかに重度の障害があっても適切な設定をすれば「選択肢の中から選ぶ」という単純な形で社会行動が実現できることを示している（望月、1996）。

そこで選択肢の設定が問題となる。既存の選択肢を否定することを尊重し、それによって非支配的な社会関係を維持することを可能にする主張や「「予測不可能」な選択状況の設定」が成功であるという指摘がある（望月、1996）。

本研究では、こうした望月の考えに従って、重度の知的障害者で選択の機会のない状況を出発点とすることから、選択の定義を「二者択一の選択設定から一方を選択し、選択した事象を行うこと。」、また「好みのカテゴリーの中で複数ある選択肢からひとつを選択すること」とする。

Ⅰ　研究の意義と目的

本研究は、重度の知的障害者を対象とし、自己選択に焦点を当て、単一事例研究デザインの手法を用い、選択の機会を設定し、選択行動を形成した上で、その選択のレパートリーを増やすことを目的とする。このことを通して、選択行動形成という個別化された対象者へのアプローチと選択の機会設定という生活環境改善へのアプローチによって、生活の質（ＱＯＬ）の向上に資すること（山本、1997）に意義を求める。

また介入は、実験室など空間的に特別に配慮された設定はせず、実生活の中で可能な設定で進めて行く、よって様々な要因が研究結果に影響する可能性も予測される。例えば、選択後その選択肢を楽しむ持続時間の測定には何らかの周囲の刺激が影響するかもしれない。しかし、実生活の中での実践としては免れ得ないことである。

また、対象者は、知的障害者更生通所施設を利用して家庭で生活している。利用している通所更生施設は、知的障害者福祉法による公立の施設である。利用者定員74名、職員数31名。養護学校高等部卒業生が社会生活を営む場として入所することが多い。しかし、以前から自宅で生活していた人が入ってくる場合もある。午前９時と午後３時に、大型バス３台が約１時間で区域内を周り、利用者の送迎を行う。利用者は愛の手帳（療育手帳）所持者となっているが、障害の種類も多く、即時医療的ケアが必要な状況になるような重い障害をもった人も多い。利用者は、靴の履き替え、更衣、排泄、食事といったＡＤＬ、また作業活動(陶芸、紙工、リサイクルなど)、余暇活動（レクリエーション、個別の趣味など)、健康維持的活動（ＰＴ訓練、散歩など)、社会参加活動（地域図書館の利用、公共交通機関の利用、喫茶・外食、無料のリサイクル書籍の配布など）など基本的生活習慣形成や活動範囲の拡大を目的にした支援を受ける。職員は、「福祉」という専門職であり、直接利用者の処遇に従事する。１名の職員が約３名の利用者のケース担当となる。スーパーバイザー的な役割を担う指導係長の下に、３つのクラスが編成されて、さらに１クラスが２つの班に分かれている体制をとっている。職員は、利用者や家族にとって、家庭内の人間以外で関わりを持つ者としては最も身近な存在となる。主な相談担当者はケース担当者となっている。

このような対象者の施設での生活の中で、セッション設定のために特別に時間を取ったり、職員の負担になるようなことは極力避ける。いわば実生活に即した状況で進めることと、こうした同様な生活環境にあって２名の対象者に適した個々の方法を用いていくことにする。

なお、重度の対象者という場合、捉え方によっては愛の手帳３度の人でも重度と言う場合がある。そこで本研究では、愛の手帳２度で養護学校卒業後の時点で進路選択の余地がなく、知的障害者更生施設に通所する人を重度と捉えることにする。

Ⅱ　研究の方法

対象者は、都内の知的障害者更生施設に通所する「愛の手帳２度」の成人２名とし、介入の方法は表－１に示す。

表－１　研究の方法

<table>
<tr><td>1</td><td>共通</td><td colspan="2">対象者の選択している状況と、選択の動機となり、行動の強化子ともなる「好きなこと」を把握する。具体的には、主たる介護者に、対象者の選択に焦点を当てた家庭内の全時間の記録を依頼する。施設内でも全行動の記録をし、１週間24時間の全行動における選択行動の頻度と持続時間および選択可能時間に選択した行動の時間比を集計する。</td></tr>
<tr><td>2</td><td>共通</td><td colspan="2">「好きなこと」とそれに誘発される、もしくは関連する事象，媒体を選択肢として選択の機会を設定する。</td></tr>
<tr><td>3</td><td>共通</td><td colspan="2">「好きなこと」を選択することで選択行動を形成する。</td></tr>
<tr><td>4</td><td>個別</td><td>より多くの選択肢を得るため、「好きなこと」が一般的である場合、例えば「電車の本」であるなら社会資源である地域図書館の利用スキルを獲得する。
二者択一の選択より３者以上の中からの選択する行動、図書館利用スキルの獲得をプロンプトフェイディング法で実施する。</td><td>「好きなこと」がこだわりなど個性的である場合、それに誘発もしくは関連する事象，媒体の選択を誘導し、課題分析と結果操作の手法によって選択行動そのものを形成することで選択肢の意味の理解を得て選択肢を増やしていく。また、問題行動のある対象者であるので選択行動が形成しやすい状況で行うべく、対象者の安定時に設定し、徐々に設定時間を広げて行く。</td></tr>
<tr><td>5</td><td>共通</td><td colspan="2">可能な選択機会の設定と選択のレパートリーの増加によって、選択行動を充実させる。</td></tr>
<tr><td>6</td><td>共通</td><td colspan="2">反応の記録および信頼性については、機会制約型反応記録法（opportunity - bound response recording)。選択行動、課題分析に準じたチェックリストを用い職員二人以上で97％以上一致率のあるものとする。波及効果についてはタイム・サンプリング法と持続時間記録法を併用する。</td></tr>
</table>

用いる手法は、課題分析、結果操作、プロンプトフェイディング法などである。以下の用語の解説は『行動分析学用語集』（島宗理、1998）による。

課題分析（task analysis）とは、「複雑な行動やいくつのも行動がつながって一連の行動になっているものを個々の構成要素に分けること。」である。

結果操作とは、「ある好子や嫌子による強化や弱化、および、それに関連した弁別刺激による行動の喚起力や抑制力に対する生体の感受性を確立する手続き。」である。

つまり、各フェイズごとに選択行動を個々の要素に分け、選択後その選択肢自体が強化子となることで結果操作となる場合と、未経験の行動を選択のレパートリーにしていく場合は、未経験の行動を選択するようプロンプトし、行動後強化子によって結果操作を行う場合が想定される。

プロンプトフェイディング法とは、正反応が起きる確率を高める補助的な刺激を徐々に減らして行く方法である。プロンプトの仕方は、時間遅延法などがあるが、重度の知的障害者を対象とすることと実生活状況で実施することの条件から遅延時間中に予測不可能な刺激の介在と不適切行動の誘発が予測される。よって、即時にプロンプトする手法を用いる。

その他、好みを捉える指標として、選択したものを楽しむ持続時間を取り上げる。

また、選択した回数を同じ条件下でたし込んで行く累積選択回数を求めることにより、好みの同定と選択状況を把握する。累積選択回数は,選択の測定と妥当性を示す手段である(望月、1995)。

Ⅲ　好みのカテゴリーから新奇性のある選択肢を選択できる事例

1　目　的

本事例では、対象者の日常生活の選択に焦点を当てた全行動記録を分析し、「積極的、自発的な選択による行動」から抽出した「好きなこと」を動機付けに、複数用意された「好きなこと」の選択肢からの選択によって選択行動を形成する。更に多くの「好きなこと」が選択可能である地域社会資源を活用することで、選択のレパートリーを増加させる。これによって、選択行動を充実させることを地域社会の資源を活用するというひとつの社会参加形態に結びつける。具体的には、本事例の「好きなこと」は、「電車に関連するもの」(カード、ビデオ、写真、本など)である。そこで、地域の図書館職員の「援助」を得ながら地域図書館で好みの本を借りることで選択のレパートリーを増加させる。

2　方　法

(1)　対象者プロフィール

対象者は年齢25歳。男性。知的障害(愛の手帳2度、合併症なし)。支援開始時、養護学校高等部卒業後知的障害者更生施設(通所)在籍7年目。

家族構成は、父、母、本人、妹(主たる介護者は母)。

コミュニケーションは、言語による意思表示、理解は可能であるが、問いかけには的を射ない回答が返ってくる。

絶えず他利用者のものまねをしたり、「電車」を話題にして職員の関心を引くことが行動特徴と言える。選択意思の表明は可能と思われるが、「AとBとどちらがよいですか。」の問いには「A。」、「BとAとどちらがよいですか。」の問いには「B。」と答える。「AとB」の意味内容に反応して選択するというよりも、順序に反応し、最初に提示されたものを機械的に選択している。

(2) 選択行動の調査と分析による「好きなこと」とベースラインの把握

① 家庭における1週間24時間の選択状況調査

対象者の家庭内における選択のレパートリーの数は11種あり、そのうち従属変数として用いる「自発的、積極的な選択による行動」のレパートリーの数は、「起床」、「新聞を取りに行く」、「ジュースを飲む」、「電車関係のものをみること」の4種とした。他の「消極的、他発的な選択による行動」は「テレビ」、「ごろごろする」、「時計に興じる」、「昼寝」、「新聞を見る」、「朝うとうとする」の6種、「生理的に必要な要素を含む選択行動」は「トイレ」で1種であった。同一時間帯に複数の選択が含まれている場合の持続時間は、選択したレパートリーの数で除することで求めた。(例:テレビをつけて、新聞をみて、時計をそばに置いている場合に60分であったら、各レパートリーに20分、頻度各1回とした。)

保護者は本人の趣味・嗜好を書き表す欄に次の以下3つをもって回答した。「とにかく電車が好きである」、「時計にこだわりがある。音と動きに関心があるようだ」、「母の指示にはすぐ返事をするか、黙っていてもその指示に従う」。

年間を通じて本人の選択を尊重するエピソードの記述はなし。

テレビ、時計、新聞に関連した時間は、保護者が家事などで対象者の介護ができずに居間で過ごす時間に見られる行動であることから、何もすることがない状況で対象者が消極的に選択した行動であると判断した。しかし、電車関係のもの(カード、本、写真など)を見ることは頻度や時間は多くはないが、「好きなこと」として「積極的、自発的な選択による行動」と見られる。

② 施設内における観察による選択状況の把握

施設に到着後の対象者の行動はＶＴＲに収録し、後にこのテープの再生により行動観察としての分析を行なった。そこから、対象者の行動はパターン化されていることが示された。選択レパートリーの数（従属変数）は、2種。本人の意思が反映したものと捉えられるのは、モノマネをしながら職員の関心を引く行動と電車のビデオを見ることを要求することの2つである。日常生活の行動は自発的に行なうのに対して、その他の施設内における行動は指示がないことには行なえないことが多い。環境の中で、存在感のある利用者(騒がしい利用者)のモノマネを常時している。また、職員の動きを目で追って、積極的に関わりを求めている。関わりの際の話題は「電車」であるが、稀に休みの職員と利用者はどうしたか尋ねることもある。

(3) 標的行動

本研究では、標的行動というのは、二者択一という単純な、選択の機会において、「甲」か「乙」2冊の「電車の本」のうちから、1冊「好きなもの」を選択できることを指す。つまり2冊のうちからいずれか一方「好みの本を選択する」という行動を形成する。次に、見る「電車の本」のレパートリーを増やすことを狙い、さらには地域図書館利用のスキルを獲得することを目指し、作業室内の棚に1列に並べられた本のうちから「好みの本」を1冊取り出し

て選択する行動を形成する。そして達成できないところは図書館職員の「援助」を得ながら、図書館利用スキルを獲得し、陳列される多数の電車の本のうちから(二者択一でない)、1冊「好きな本」を選択できることが最終的な標的行動とされる。

(4) 標的行動の達成に関わる環境の把握

対象者の「好きなこと」である「電車の本」の選択の定着とそのレパートリーの増加を想定すると、施設内での選択行動形成後、地域図書館を利用するのが有効と判断した。通所施設から徒歩約15分で利用可能な地域図書館がある。自宅近辺にも別の地域図書館があるが、施設内のメニューとして実施するためグループで散歩のコースにおける立寄り(訪問)先の一つとし地域図書館での利用を図る。

自治体事務所と同一敷地内にある地域図書館は、自治体職員とボランティアによって運営されている。蔵書は近隣住民の持ちよりによるものが多い。「コミュニティ図書館」と言われる形態をとり、まさに地域に根ざした図書館である。

対象者はビデオを見ることを要求するが、電車関係のものは少ない。ビデオは可能な場合(図書館に入荷した場合など)に図書と置き換えて実施する。

なお、図書館内ではどうしても一人で「好きな本」を選択できない場合には、図書館職員の援助を得ながら、選択できるところまで範囲を広げることにする。

また、本研究においては、「電車の本」の多くが育児、幼児、小学校低学年向けの絵本,写真集であること、また対象者の言語能力,認知能力の現在水準、これらを考慮して、「電車の本」を「読む」ではなく「見る」という表現に統一することにしたい。

(5) 実施場所と設定

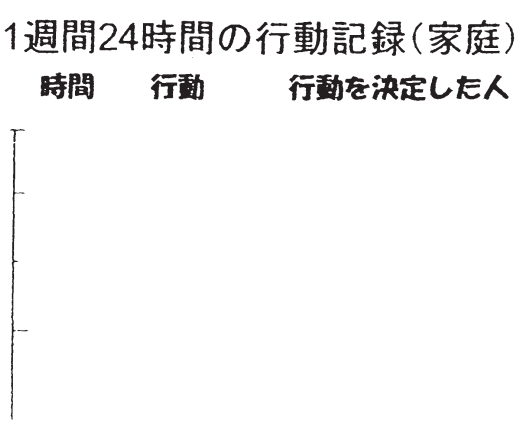
職員の提示する「電車の本」による二者択一の選択行動の形成と陳列された状態から「好きな電車の本」を選択することの形成を図るために、作業室内(図－2)の書棚を使用することによって介入がなされる。約80センチ幅の本棚には、「電車の本」、「バス」、「自動車」、「フィクションのヒーロー関係の本(ウルトラマン、仮面ライダー、ゴーゴーファイブなど)」が陳列されている。

選択のレパートリーの増加を促す介入は、地域図書館(図－3)において実施される。

(6) 選択肢の設定

二者択一の選択行動形成を図る介入で用意された選択肢としての本は、「電車の本」であり、以前から作業室内にあって、対象者が時折見ていた「見なれた本」および、「新規に準備した電車の本」である。

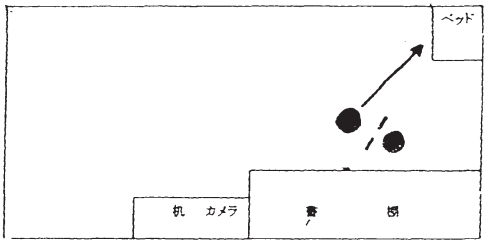
地域図書館で選択肢と定められた本は、図書館の蔵書として「電車の本コーナー」に配列される「電車の本」約25冊とする。



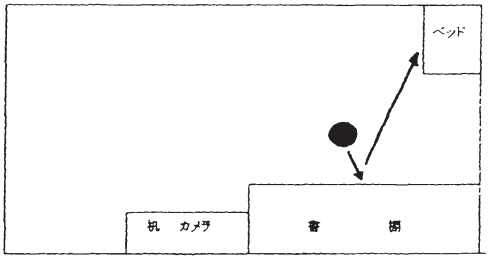
図－1　家庭における行動観察記録票

表－2　集計結果の一部抜粋

自己選択統計1			S.O				
		8月18日			8月19日		
選択行為		回数	時間(分)	占有率	回数	時間(分)	占有率
起床	s	1	15	3.968254	1	12	2.696629
トイレ	s	1	10	2.645503	2	20	4.494382
テレビ	p	3	99	26.19048	3	134	30.11236
ごろごろす	n	2	51	13.49206	1	72	16.17978
新聞を取り	p	1	120	31.74603	1	22	4.94382
電車に興じ	p	1	41	10.84656	0	0	0
時計に興じ	p	0	0	0	1	23	5.168539
ひるね	n	0	0	0	1	30	6.741573
ジュースを	p	0	0	0	1	5	1.123596
新聞を見る	p	0	0	0	2	73	16.40449
朝うとうとす	p	0	0	0	0	0	0
		9	336	88.88889	13	391	87.86517
選択可能時間			378	11.11111		445	12.13483



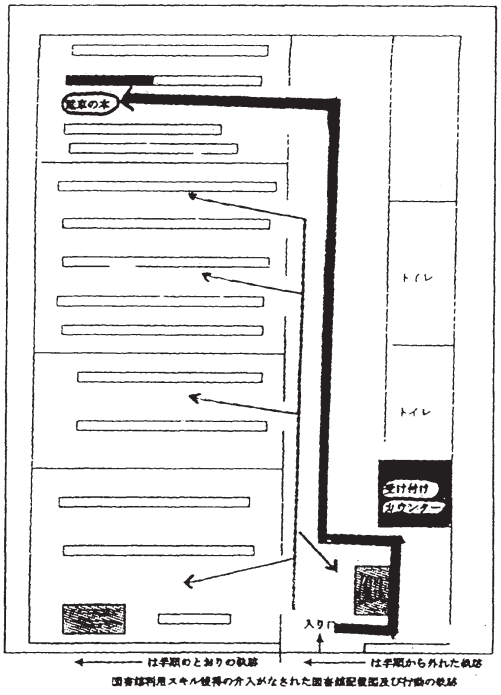
二者択一の選択行動形成の介入場所となった作業室内配置図



書棚からの選択行動形成の介入場所となった作業室内配置図

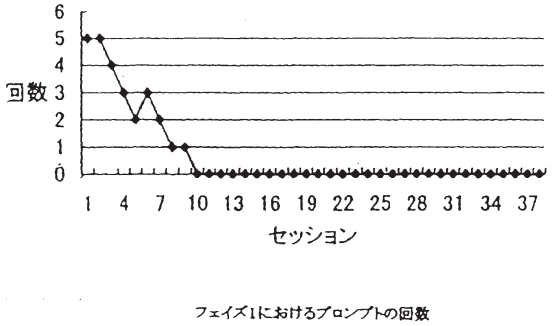
※矢印は対象者の選択後の動きを表している。図にあるように対象者はベッドに移動して選んだ本を見た。

図－2　作業室内



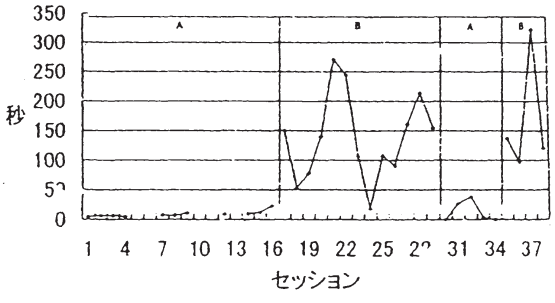
図書館利用スキル獲得の介入がなされた図書館配置及び行動の軌跡

図－3　図書館



フェイズ1におけるプロンプトの回数

図－4　フェイズ1においての
プロンプトの回数



フェイズ1における「本を見た時間」

図－5　フェイズ1において
本を見た時間

(7) 介入プログラム

標的行動の形成に向けて、フェイズ1から4までの介入を順を追って実施する。達成基準は職員2名が各フェイズの達成基準を満たしたと一致して判断した場合に次のフェイズに進むこととした。

① フェイズ1：二者択一の選択行動の形成(職員の提示する2冊の本から1冊選択する)を図る

作業室内にて、後に示す課題分析(場面1)を行う。全セッションＶＴＲ記録を行い、後刻再生されたＶＴＲを視聴して職員2名が確認する。選択肢に使われた本は、以前から作業室内にあって昼休みなどに見ていた「見なれた本」12冊である。これらのうちからランダムに2冊を選び、職員が提示する。次には「見なれた本」12冊のうち1冊と「新しい本」4冊のうち1冊という組み合わせによる提示を行なう。その後は「見なれた本」と「見なれた本」という対、また「見なれた本」と「新しい本」の対による提示に戻す。つまり単一事例研究デザインのABABデザインの手法を用いる。

② フェイズ2：書棚からの選択（背表紙をやや引き出した状態から1冊選択する。）

作業室内にて、後に示す課題分析(場面2)を行う。全セッションＶＴＲ記録を行い、職員2名で確認する。選択肢は、「新しい本」を使用する。本は書棚に並列に配置されているが、背表紙が他の本より抜き出ていて、孤立効果によって当該の本が選びやすくなっている。

③ フェイズ3：書棚からの選択（本が並列の状態から1冊選択する。）

フェイズ2と同様に作業室内にて、課題分析（場面2）を行う。達成基準は、各項目をクリアすること。全セッションＶＴＲ記録を行い、職員2名で確認する。選択肢は「新しい本」を使用する。本は書棚にあり、並列になっている。そこから「新しい本」を選択する。フェイズ2におけるプロンプトは行なわない。

④ フェイズ4：選択のレパートリーの増加（地域図書館に出かけ好みの本を選択し、借るスキルの獲得。）

地域図書館にて、課題分析（場面3）を行う。全セッションＶＴＲ記録を行い、職員2名で確認する。支援者と対象者、および図書館職員とのやり取りを記録する。プロンプトを分類し、達成困難な部分を同定する。困難な部分の対応を考察する。また達成困難な部分で地域図書館職員の協力によって対応できる場合には、図書館職員に協力を依頼する。

(8) 課題分析

課題分析を行ない、次に列挙するサブスキルに図書館における選択行動を分節化した。そしてより下位のこれらの要素的な行動の形成を意図しつつ、大きな単位となっている選択行動の形成を図ろうとした。

（場面１）施設内図書選択行動のサブスキル

① こんにちはの挨拶をする。
② 職員の提示する２冊の本からどちらか一方を選ぶ。
③ 図書カードを職員に渡す。
④ ありがとうと礼を言う。

（場面２）施設内図書選択行動のサブスキル

① こんにちはの挨拶をする。
② 前回借りた図書を職員に返す。（初回はない。）
③ 本棚から図書を選ぶ。
④ 図書カードとともに職員に渡す。
⑤ 袋に入った図書とカードを受け取る。
⑥ ありがとうと礼を言う。

（場面３）地域図書館利用における選択行動のサブスキル

① こんにちはの挨拶をする。
② 前回渡した図書を職員に返す。（初回はない。）
③ 本棚から図書を選ぶ。
④ 図書カードとともに職員に渡す。
⑤ 袋に入った図書とカードを受け取る。
⑥ ありがとうと礼を言う。

行動の強化子は、選択した本自体が強化子となると判断し、特に設定しない。

(9) 反応の記録および信頼性

プロンプトの実施回数、見た本の種類と累積選択回数、見た時間、反応潜時を記録する。

各課題の達成水準に達したかは、課題分析に準じたチェックリストを用い職員２名の一致で判断する。

タイム・サンプリングにより独立変数導入後の家庭生活状況とベースライン期の状況を比較する。

3 結 果

(1) 二者択一の選択行動の形成

フェイズ１における対象者の二者択一の選択行動形成は、37セッション実施した。プロンプトの回数を図－４に示した。二者択一という単純な選択でも、表紙を対象者側に向けて、「どちらか好きな方どうぞ。」というプロンプトをしなくてはならなかった。初回、本を手に取らず表紙を眺めていたり、２セッション目では両方手に取ろうとした。図書館利用を想定し、図書カードのやり取りについて課題分析を設定した。本を選択後関心が本に向いて図書カードを支援者に渡すのを忘れて、「ＳＯ君、カードは。」のプロンプトをしないと、本をもってその場を離れてしまった。10セッションまで図書カードを渡すことへのプロンプトを要した。

フェイズ1の選択肢は、セッション1から16までの間を「見なれた本」と「見なれた本」、セッション17から29までの間を「見なれた本」と「新しい本」、セッション30から34までの間を「見なれた本」と「見なれた本」、セッション35から38までの間を「見なれた本」と「新しい本」によって構成した。選択肢に、「新しい本」が含まれている場合、選択されたのは全て「新しい本」であった。選択後の本を見た時間を図-5に示した。対象者が本を選択し、その本を手放して別な行動をするまでの時間を秒で示してある。対象者は、セッション終了後、作業室脇にある他利用者用のベッドに座って本を見るが、周囲に対象者が好んでモノマネをしている利用者、実習生やボランティアの存在が気になり、集中してその本を見ることができないことが多い。24セッションでの減少の理由は明らかではないが、このような実生活状況での要因が関係しているとも考えられる。「新しい本」が選択肢として提示された場合は、全て「新しい本」を選択したこと、並びに「新しい本」を選択した場合、「見なれた本」を選択した場合より長い時間見ていることから、同じ電車の本であっても、より新奇性の高い選択肢を選択することが明らかになった。

なお、選択したのもと選択後見た時間はＶＴＲに記録した。

(2) 地域図書館利用スキル獲得に向けての支援

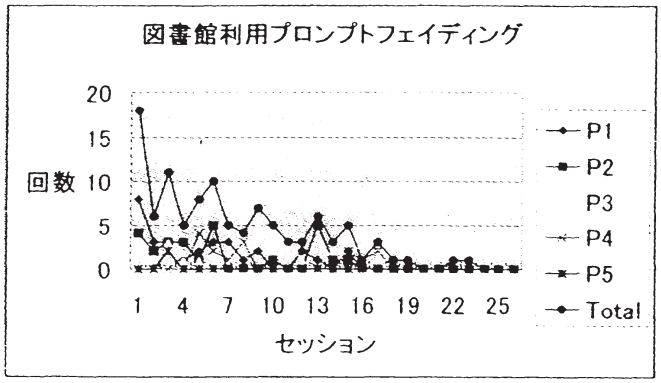
フェイズ2では、書棚に配列された本の中から「新しい本」を選択する。ここでは、「新しい本」が約8cmほど引き出され、このように突き出している分だけ視覚的な手がかりが多くなっている。5セッション実施し、全てプロンプトなしで達成した。

フェイズ3では、フェイズ2にあった視覚的な手がかりは取り除かれ、選択肢とされた本も他の本と同じように書棚に配列されていた。しかし15回のセッションを通し、書棚に並べられる他の本に惑わされることもなく、また特別プロンプトがなされなくとも書棚にある電車の本を選ぶことができた。

(3) 地域図書館利用スキル獲得と選択のレパートリーの増加

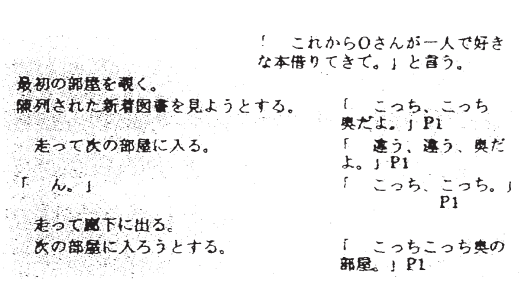
地域図書館利用スキル獲得と選択のレパートリーの増加を図るため、1999年7月24日から12月21日まで26回のセッションをもった。実施されたのは、E区○○コミュニティ図書館である。散歩のメニューとして他利用者も同行した。プロンプトの回数の変化を図－6に示した。プロンプトは徐々に減少した。

対象者の行動はＶＴＲに記録し、以下の図－7に示すようなやり取りの記録を作成した。プロンプトの実施状況から対象者の達成困難な課題を同定し、対応を検討した。課題分析に基づいた表－4に示すようなチェックリストを用い、2名の職員で一致率を計算し、97%以上であることを確認した。



プロンプト P1:場所に関するプロンプト
P2:選択に関するプロンプト
P3:交渉に関するプロンプト
P4:手順に関するプロンプト

図－6　図書館を利用した場合のプロンプトフェイディング



図－7　図書館でのやり取り記録

表－3　図書館で選択した本

図書の選択結果

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	T
山陽鉄道	1																1										2
東急鉄道		1						1				1		1													4
西日本鉄道			1				1													1							3
阪急鉄道				1							1																2
南海電鉄					1					1															1		3
京阪鉄道						1																					1
名古屋鉄道																								1			1
京成電車									1													1		1			3
大阪市交通局													1														1
小田急電鉄																		1							1		2
京急電鉄																									1		1
近畿日本Ⅱ																	1						1		1		2
京王帝都													1											1			1
東都鉄道																								1			1
西武鉄道																							1				1
営団地下鉄																		1							1		2
山陽鉄道																1											1
鉄道ファン													1	1													2
特急図鑑														1													1
不明															1												1

表－4　地域図書館利用スキル獲得チェックリスト

		評定者 Y	T
1	カウンターに行く	－	－
2	図書を差し出し名前を言う	－	－
3	図書とカードを受け取る	－	－
4	図書のあった場所に行く	－	－
5	図書を選択する	－	－
6	カウンターに持って行く	－	－
7	図書とカードを差し出す	－	－
8	手続きを待つ	○	○
9	図書を受け取る	○	○

フェイズ4の地域図書館利用スキルの獲得では、プロンプトは10セッション目まで顕著な減少傾向を示した。特に場所に関するプロンプトは初回から多く必要とされたが、回を重ねるごとに減少していった。しかし、完全にプロンプトを必要としなくなるまでに、19セッションと多くの時間を要した。20セッション目から連続2セッションほどプロンプトは要せず、スキルは獲得されたかに思われたが、ビデオ撮影者、同行した利用者や職員に関心が向けられると本を選び出す行動が途切れてしまい再びプロンプトが必要になった。セッション18以降、対象者が達成不可能な部分は、図書館職員の協力を得た。対象者は電車の本が陳列してある場所について本を選択する時、図書カードを書棚の3段目に置き忘れることがあった。そこ図書返却時、図書館職員に図書カードを対象者の鞄に入れてもらった。また、カウンターから「こっちよ。」と言う返却手続きと貸し出し手続きへの誘導をしてもらった。以降セッション22では、スタートから手続き前までプロンプトなしで達成したが、外で待つ他利用者のところまで直進してしまう。手続きするようプロンプトし、再び中に入ったが、また本のところに行く。その後はカウンターにプロンプトなしで行き、手続きを完了した。

セッション23では、場所を間違えるが、プロンプトせず。選択後他利用者のいる部屋に入り、探索行動、他のクラスの職員と接触。職員の動きについて周る。再び本のあるところに行って戻る。「帰るよ。」といってカウンターを指差すと手続きを完了した。再度、図書館職員に手続きを促してくれるよう依頼した。

セッション24では、他利用者なしで、支援者と2人で実施、図書館職員のはじめの「どうぞ」と終わりの「こっちよ。」のプロンプトはあったが、支援者のプロンプトはなしで完了した。

セッション25でも、職員と2人で実施した。図書館職員の呼び込みと終わりはトイレに立つ図書館職員と出くわして、そのまま貸し出し手続きをした。プロンプトなしで完了した。

セッション26では、他利用者と共に行く。はじめと終わりに図書館職員の誘導があった。支援者のプロンプトはなしで完了。お礼のあいさつと品を対象者の手によって渡し、図書館職員は対象者のために用意しておいてくれた本を一冊プレゼントしてくれた。

選択肢の累積選択回数（表－3）から、選択肢は「電車の本」というカテゴリーのみに集中しているが、それらの「電車の本」のカテゴリー内の種類は多様であることがわかる。このことから新奇性のある選択肢を選択していると判断される。

4　考　察

フェイズ1では、図書館利用を意図して図書カードのやり取りを含んだ二者択一の選択行動の形成を目的としたが、初回から10セッション目でプロンプト回数は0になった。図書カードのやり取りと二者択一という単純な選択でも、新しい行動の形成は容易ではなかった。また、これを通じて「見なれた本」と「新しい本」による選択後のそれを楽しむ持続時間を見ることにより、「電車の本」という好みのカテゴリーの中でも新奇性のある本を好んで選択するという結果が示された。これによって、より多くの新奇性のある図書を選択できる図書館を利用することになった。

フェイズ2では、図書館利用スキルの獲得のため、並列に配置された図書の中から好みの本

を引き抜く行動の形成のために設定した。予め対象者の好みである「新しい本」を約80センチ幅に陳列された本棚に約８センチ程度引き出しておく設定をしたが、初回からプロンプトなしで「新しい本」を選択できた。そしてフェイズ３でフェイズ２の設定されたプロンプトを排除しても「新しい本」の選択はプロンプトなしで達成された。選択行動の形成にとって、「好みの本を見たい」という動機付けというのが重要であると思われる。

フェイズ４では、図書館の「電車の本」のある場所が奥に位置しているために、対象者にとって場所の同定が困難であった。しかし、16セッション目で場所の同定が達成された。

プロンプトは徐々に減少したが全く不要とはならなかった。この原因の一つに支援者がビデオ撮影のため、対象者の行動を後追いしたことが、対象者にとり行動を指示してくれる絶好の弁別刺激になってしまったことが挙げられる。プロンプトが11月16日に１回になった。ビデオ撮影の際、距離を意識して実施したことによると考えられる。しかし、次のセッションでは、対象者はビデオ撮影者を探し出してしまいプロンプトを求めてきた。

また、図書館は地域住民の主体的運営による小規模な図書館であり、返却手続き後自分でその本が元にあった場所に戻さなくてはならないことも見逃せない。なぜなら、「電車の本」が書棚の最上段にあり手に持っていたカードを３段目の棚に一旦置き両手で本を戻した後、別の本の選択をすることがしばしばあったからである。この際、図書カードを置き忘れることも珍しくなかった。ここは図書館職員に協力を求めて、返却手続き後、対象者が持ってきたバッグに返却する本と共に入れてくれるように依頼した。これによって、図書館職員によって実施し忘れる場合も稀にあるが図書カードの置き忘れの問題は解決した。すなわち、このバックの導入以降置き忘れることはなくなった。

対象者にとって「好みの本」が見られることが次回の動機付けとなり、また選択後借りたその本が選択行動の強化子となったと判断できる。昨今の応用行動分析では、地域生活技能に焦点を当てた、公共機関の利用、電話の利用、買い物など多岐に渡っている(松岡･小林、1999)。本研究では、図書館の利用ということでは広くは生活技能と解釈されると考える。しかし、生活技能習得支援プログラムが、社会で自立して行く上での支援に有効な技能を追求するとした場合、むしろ本研究は生活の質（ＱＯＬ）の向上に直結するであろう趣味･嗜好の充実に焦点を当てるものと捉えることができる。

また、環境からのアプローチと対象者からのアプローチの相互のやり取り（山本、1997）によって行動を形成する考えから、対象者が単独で図書館に入り、本を選択し、貸し出し手続きを終えるまでを要求するのではなく、対象者が達成困難な部分は、図書館職員の援助が環境からのアプローチとして前提になる。

「電車の本」以外の興味･関心の広がりについては、「電車の本」への関心が強すぎて向かなかった。

対象者の生活は、家庭と通所施設の往復で自分の意のままに外出したり、欲しいものを手に入れたりする機会は著しく制限されている。家庭では主たる介護者の監護のもとで，好きな電車の本やビデオを見て家の中で過ごし、通所施設に通所して、決められたメニューに参加している。本研究を通じて、図書の選択行動を形成することで、新奇性のある本への関心が動機と

なり、家庭と通所施設以外に地域の社会資源である図書館を利用することで選択のレパートリーを増加させることに成功した。

このように、地域に根ざした資源を活用して、生活の幅を広げて行く研究は、海外ではコミュニティ・ベイスト（community-based）と言われている。しかし、重度の知的障害者を対象としてのそれらの方法は、重度の知的障害者が地域のサポート・サービスを受けながら地域に溶け込んで生活している欧米の状況と未だ家族の介護の手に頼る日本の状況とは大きな違いがある。概して家庭と通所施設のみの生活の枠組みの中で甘んじていればよい風潮もある（加藤、1995）。本研究は、いわば地域生活の拡充ということでは目を向けられなかった重度の知的障害者の生活を、好きなことを選ぶ機会を得ることを動機に選択行動を形成することによって広げたものであると言える。

図書館にある電車の本は、無尽蔵にあるわけでない。いずれ「借りたい」という動機が薄れ、一般にそうであるように気の向いた時にしか図書館を利用しなくなるかもしれない。あるいは、電車の本以外のジャンルの本に関心をもって借りることで、さらに別の関心が生成する可能性を持っているとも考えられる。

「A君は○○が好きだから、○○があれば安定する。」といったことは、よく見かける状況である。常にA君のもとには○○がある。A君の安定に本当に寄与していれば、それもよい。しかし、そこから関連した事象からでも新奇性のある刺激に触れることで生活経験は有効に広がる場合があると考えられる。しかも自分から選択するという主体的な行動を伴うことで、環境からの働きかけという刺激に主体的に反応し、それを楽しむことでさらに主体性が強化されることになると考える。

Ⅳ　こだわりのため選択肢からの選択が困難であった事例

1　目　的

本事例では、「こだわり」が強く問題行動のある人を対象にする。先に示した事例と同様な調査によって、ベースラインと「好きなこと」を把握する。そこで、「こだわり」を「積極的、自発的な選択行動」つまり「好きなこと」と捉える。「好きなこと」の行動を象徴する媒体で選択行動を形成する。そして対象者が経験したことのある行動を選択肢に加えていく。更に、「こだわり」から社会化された新しい未経験の行動を選択肢に加えていくことで、「こだわり」から「関連した社会化された行動」の選択を可能にする。このような中で選択のレパートリーを増加して行く。なお、本研究でいう「社会化」は、周囲から受容される行動様式を形成するという意味で用いる。

2　方　法

(1)　対象者プロフィール

対象者は、28歳男性。知的障害（愛の手帳２度、合併症なし）。ＩＱ測定不能。養護学校高等部卒業後序論で示した東京都内Ａ区知的障害者更生施設通所7年目。家族構成は父、母、本

人（主たる介護者は母）。

健康状態は、喘息のため発作時および夜に吸引服薬をする。他に精神科の薬物服薬あり。身長172センチ、体重70キロ。

薬状況は表－5に示すとおり。

表－5　服薬状況

薬　品　名	1　日　量	回　　数	薬　　効
インタール	2㎖アンプル	一日一回	アレルギー疾患用材
ベネトリン	0.3㎖	喘息発作時のみ	鎮咳剤
テオドール	6錠	朝・夕	喘息発作予防剤
メプチン	3錠	朝・昼・夕	鎮咳剤
レベルボン	3錠	朝・昼・夕	去炎剤
レキソタン（2）	3.5錠	朝・夕	精神安定剤
セレネース（1.5）	3.5錠	朝・夕	精神科用剤
アーテン	2錠	朝・夕	パーキンソン症候群治療剤
ヒルナミン（25㎎）	2錠	朝・夕	坑精神剤
テグレトール（100）	3錠	朝・夕	坑けいれん剤

（1998年4月現在）

こだわりが強く、情緒不安的時は他害行為もある。常時職員は一対一の体制で対応している。集中して行える作業種目もない。集団活動も苦手である。不適切な行動およびパニックの時のみ行動抑制が必要になる。

コミュニケーションは、発話はないが、指差しで要求することはあり、簡単な言語による指示は通じる。

(2)　選択行動の調査と分析による「好きなこと」とベースラインの把握

①　家庭における1週間24時間の選択状況調査

前章の事例と同様に、家庭内の選択状況調査を、1998年4月19日～4月26日に実施した。記入者は主たる介護者である母に依頼した。記入者は配布の調査票に記載せず、レポート用紙にメモし、後日記入票に記載する予定であったとのことであった。そのメモを頂き、データを集計した。

「水のみ」、「コーヒー入れ」、「体操」を「積極的、自発的な選択による行動」と判断した。「食事のお替わり」は生理的欲求による選択と積極的選択との中間に思われる。尺度となる「積極的、自発的な選択による行動」のレパートリーは3種とする。

記入者との面談および家庭訪問から、記入者は「記入者が肯定的と判断した行動を対象者が指示なしで行ったこと」を「本人による選択」と記載していることを確認した。また、

施設内で見られるような常同行動は家庭内でも見られる。

② 施設内における観察による選択状況の把握

1999年4月9日から1999年4月19日までの間で5日間全行動の観察記録を実施した。観察方法は、対象者を担当する職員が、時間・行動・場所を観察して記録し、またＶＴＲで収録する。その後、その記録データを確認して行く。

職員は、対象者の「こだわり」の行動を阻止することによる問題行動の誘発を避けるため、対象者のペースに合わせた対応をする。つまり、対象者の活動は空間的制限を前提に自由にされて、常時職員はそれを見守ることが多くなる。集団活動として設定された活動は「拒否」か、あるいは「指示に従うこと」によってごく短時間の参加が見られる程度である。よって、施設内での積極的な選択行動は0と判断した。

(3) 標的行動

対象者の「好きなこと」は、「こだわり」の行動とする。つまり、ポットに水を汲んで一口飲み捨てる行動、水道の縁に置いてある対象者の行動のためのコップを使って同様に水を汲んで一口飲んで捨てる行動、トイレに行くことの3つを頻繁に行なっている。トイレ後に手を洗うことは、誘導しないと行わないことから、単に「水」のこだわりではなく、「汲んで1口飲み後は捨てる」、つまり「汲む」「1口飲む」「捨てる」のいずれかか、これらの組み合わせによる行動が「こだわり」であると考えられる。

また、帰宅後に車で外出しても車外には出ず、一切外を歩くことはないため、通所中は可能な限り、「散歩」を活動として設定してきた。

よって、抽出された3つの「好きなこと」と従来から行なっている活動で「散歩」を選択肢にして選択行動を形成する。次に経験したことのある活動を選択肢に加えて選択行動を形成する。例えば、リサイクル活動の「空き缶洗い」、「新聞運び」、「広告入れ」を選択肢として設定する。更に「好きなこと」また「選択できるようになった選択肢」に関連した活動、例えば「ペットボトル洗い」を選択肢に設定し、新しい選択肢を選択するよう誘導する。課題分析と結果操作によって選択した行動を強化して、選択肢の意味を理解してもらう。この方法によって新しいレパートリーを選択する選択行動を形成する。

つまり、第1に「好きなこと」による選択行動の形成。第2に「経験したことのあること」による選択行動の形成。第3に「好きな事に関連した新しいこと」による選択行動の形成。段階的、構造的に3つを標的行動とする。

(4) 標的行動の達成に関わる環境の把握

対象者の行なう問題行動とは、「他者の所有する鞄（特に黒い鞄、ルイ・ヴィトン）を強引に奪い取ること」、さらに強引に奪った物の返却を求めると過剰に興奮し、自分の所有物とするためか「それを破ること」をいう。そのため生活環境の空間は極めて限定されている。例えば、対象者が家庭で外出することは稀で、自家用車で外出する時も車外に出る事は許され

ていない。よって対象者の生活は、家庭内と通所施設内のみということになる。しかし生活空間を物理的に広げるといった環境操作は安易に設定できない。

施設内での積極的な選択が0であるということは、対象者の自由な行動を認めることを選択と判断せず、それは限られた活動空間で対象者にとっては行わざるを得ない同様な行動を繰り返している状況にあると判断したことによる。

(5) 実施場所の設定

試行期のフェイズ1から4までの介入場所は、選択肢にする「こだわり」行動を行なう直前と行動中に写真の随伴提示をするため、「こだわり」行動を行う場所とした。

施設内別館食堂の対象者の座席に対象者が着席し、支援者は対象者にテーブルを挟んで対座し、テーブル上に切り抜き写真を提示することによって実施した。その際、セッションごとに左右ランダムに選択肢を提示した。

(6) 選択肢の設定

対象者の「こだわり」であるポットに水を汲んで一口飲み捨てる行動を「ポット」(以下「ポット」とする)、水道の縁に置いてある対象者の行動のためのコップを使って同様に水を汲んで一口飲んで捨てる行動(これを行なう場所が2か所ある)を「コップ」(以下「コップ」)とする、頻度が高い「トイレ」(以下「トイレ」とする)の3つを、後に行動を象徴する媒体が必要になることを想定し、写真カードで試行した。試行期で求めたい結果が得られず、実物で試行後、より理解し易いと判断した選択対象物を切り抜いた写真(以下「切り抜き写真」とする)での試行を経て、手にとって渡してくれる反応が見られるようになった切り抜き写真を選択肢に示す媒体として決定した(図－8)。

(7) 課題分析

課題分析を行い、次に列挙するサブスキルに選択行動を分節化した。

① 二者択一の選択行動を形成

1) テーブルに向かいイスに着席する

2) 提示された2つの切り抜き写真のうちどちらか一方を選択する

3) 即時にその選択した行動を行う

4) 手を叩いての賞賛を得る

② 新しいレパートリーを選択する

1)既に選択経験のある選択肢と経験していない選択肢を二者択一で提示されたのを見る。

2) 選択しない、両方指差す、既に選択経験のある選択肢に手を伸ばすなどの行動が見られたら即手を経験したことのない選択肢に誘導する。

3) 経験したことのない選択肢を手に取らせる。

4) 即その活動に入る。

5） 1サイクルごとに拍手と言語的賞賛（「ＯＫ」、「いいよ。」）を得る。

例えば、「ペットボトル洗い」の場合の1サイクル

5－1）カゴからペットボトルをひとつ取る。

5－2）水を中に入れる。

5－3）水を捨てる。

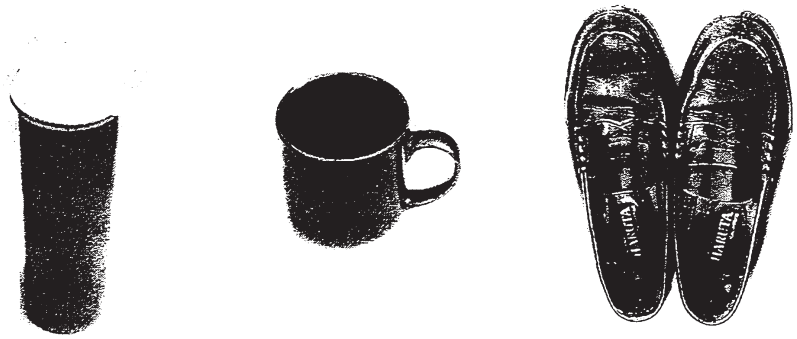
5－4）職員に渡す。

また、行動中職員の顔を見たら拍手（手を1、2回叩く）をする。

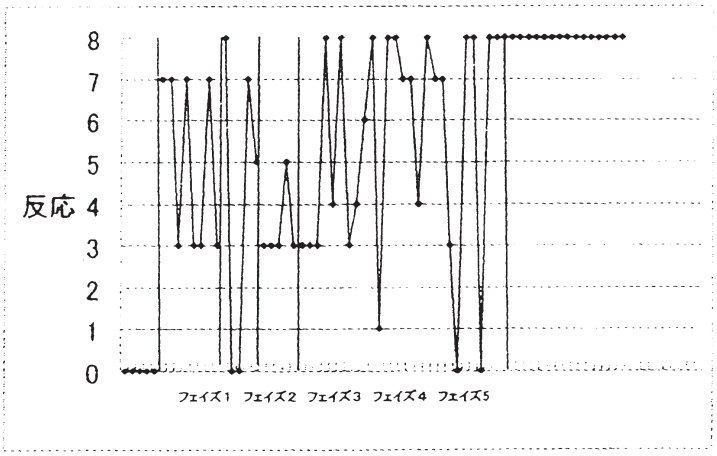
6） 材料がなくなった時、関心がなくなって活動を終結する時更に拍手と言語的賞賛を与える。行動の継続は強要しない。

(8) 反応の記録及び信頼性

選択設定と反応は全てＶＴＲに記録する。各セッションで選択したものは累積選択回数として把握する。潜時を記録する。職員2名の一致で反応の正否を判断する。



図－8　切り抜き写真カード



8：見て摘んで渡す
7：見て指差す
6：見て支援者の手をとって示す
5：見て両方指差す
4：見ないで指差す
3：見ないで両方指差す
2：見るのみ
1：見ない
0：拒否

図－9　選択行動形成の試行期

3 結 果

(1) 試行期

試行期では、写真カード、実物、切り取り写真など選択媒体の条件により、フェイズ1から5までを設定した。選択肢提示後の対象者が示した反応を記録し、行動のカテゴリーを0から8まで分類、ランクづけして「選択している」と判断される反応を6から8までと職員2名で確認し、決定した。各フェイズごとの結果を図－9に示す。なお、セッションごとの反応のランクづけは、対象者の行動をＶＴＲに記録すると共に職員2名の一致で確認した。

フェイズ1では、写真カードによる選択設定を1999年6月22日から7月5日まで5セッション実施した。「好きなこと」である「ポット」、「コップ」、「トイレ」の各写真による選択設定は、対象者にとって言語より視覚に訴える方が、理解しやすいと判断したことによる。「好きなこと」を象徴化した「ポット」、「コップ」の二つの写真（Ｂ4サイズ）を提示し、「どちらがよいですか」と問いかけをする。実施時間は特に限定せず、「好きなこと」を行う前や最中に設定した。支援者の顔を見てしまって写真を見ない行動が多く、対象者の後方に廻って顔の前に提示するなどしたが結果は、5セッションとも、「即拒否、見向きもしない」で反応0に該当した。

フェイズ2では、写真カードによる選択と行動の随伴提示、つまりマッチング形成を意図した設定を1999年7月6日から7月26日まで、8セッション実施した。フェイズ1では選択設定場面すら成立しなかったので、写真が何を意味するのか伝えるため、「好きなこと」の行動に従事している間に写真を随伴提示した。また、選択肢にすることを意図している「経験のある行動」もマッチング形成するため、Ｂ4版の写真をカードケースに入れ、空き缶洗いの活動中に随伴提示した。散歩中には「靴」、新聞運び中には「新聞の束」、広告入れの時は「広告」の写真を使用した。随伴提示して、その行動が途切れた時に二者択一の選択機会を設定する。結果は、「好きなこと」の行動と写真を随伴提示した直後の設定でのみ随伴提示したものを指差す行動が8セッション中4セッションに見られた。

フェイズ3では、実物による選択を1999年7月29日から8月6日まで5セッション実施した。設定理由は、フェイズ2でマッチングが効力を持つのは、その直後のみであるため、更に判り易いと予測される実物による選択肢の設定をした。「ポット」、「コップ」、「新聞の束」、「広告」の実物を選択肢として使用した。結果は、「新聞の束」、「広告」は即反応即拒否。活動や「トイレ」は実物の選択肢にするのは難しく、実物は理解し易いが活動を示すのは、シンボル化したものが必要となり、再び写真カードで実施することにした。

フェイズ4では、再び写真カードによる選択を1999年8月9日から8月17日まで5セッション実施した。方法は、午前、午後の活動前に写真カードによる二者択一の選択機会を設定した。結果は随伴提示をしない選択設定では、写真を見ない、見ても両方指差すなどの反応しかなく、随伴提示の必要性を確認した。

フェイズ5では、切り抜き写真カードによる選択を1999年8月18日から9月3日まで25セッション実施した。設定理由は写真に示された選択肢の図をより認識しやすくするため写真カードの選択肢の周囲を切り抜いた。設定はフェイズ3と同様。結果は、摘んで渡してくる反応が現れる。午後2時以降に実施した場合の正反応が多い。

(2) 選択行動の形成

5フェイズからなる試行期を経て、対象者が選択設定の場に安定して取り組める午後2時で選択の機会を設定し、徐々に時間帯を午後1時、午前10時に引き上げて行くことにした。

介入1では、1999年9月6日から9月14日まで実施した。設定は午後2時以降の心理的に安定して新しいこと取り組み易い状態(以下「安定時」とする)に行なった。「ポット」と「コップ」、「トイレ」と「コップ」、同時に午前、午後の活動時は、行動と切り抜き写真の随伴提示を実施した。選択設定後の結果は、正反応する。

介入2では、1999年9月16日から9月24日まで、実施時間を繰り上げて午後1時に、「ポット」と「コップ」、「トイレ」と「コップ」の組み合わせで設定した。選択設定後の結果は、正反応する。

介入3では、午後1時に「経験のある活動」のレパートリーを二者択一の選択設定で1999年9月27日から10月22日まで実施した。選択肢提示後10秒待ち、選択しない場合、「こっちをやって見よう」とプロンプトして、「経験のある行動」の選択肢を選択させて、即その活動に入るようにした。このような活動のレパートリーを増やす方法を導入した。選択設定後の結果は、正反応する。

介入4では、1999年10月25日から11月8日まで実施した。午前10時に「ポット」と「コップ」、「トイレ」と「コップ」、「午前の活動」の選択機会を設定した。「午前の活動」は、雨天時以外は選択肢の一方に「外出」を設定した。このことよって、家庭内の選択状況調査から明らかになった常時「外出」が制限されている状況から、「外出」を選択する機会を設定し、対象者の選択が「外出」に偏れば、対象者の要求が表出されている状況、つまり選択行動の形成が確認されることになる。結果は、「外出」の選択が高頻度で見られた。

更に、午後1時に未体験の新しい選択肢である「ペットボトル洗い」を導入した。選択肢提示後10秒以上の時に選択のプロンプトを実施し、「ペットボトル洗い」を選択させた。「ペットボトル洗い」を設定して3セッション目以降、自発的に選択が見られた。それ以後プロンプトなしで2回選択したので、その後プロンプトは実施しなかった。選択後は、課題分析にあるように、初回、ひとつ洗い終えたら言語的賞賛を付与した。それのみでは途中離席があったので、対象者が職員の顔を見るたびに職員が手を叩いて賞賛のサインを送った。離席はなくなり、作業室内にあるすべてのペットボトルを洗いたいと指差しと「アー」という声を出して主張する場面が見られた。1999年11月9日から12月6日まで、「ペットボトル洗い」を含めた選択行動の般化の確認を実施した。

介入5では、午後1時に未体験の新しい選択肢である「昼食で使用したクラス全員のコップ洗い」(以下「コップ洗い」とする)を導入し、1999年12月13日から12月17日まで実施した。初回の設定からすべて「コップ洗い」を選択した。選択後の行動強化の方法は、介入4)のペットボトルの時と同様である。3セッション目では、選択設定前に設定場所から離れないこともあった。1999年12月20日から12月27日まで、「コップ洗い」の般化の確認を実施した。

(3) 選択した選択肢（累積選択回数）

各条件下で選択した選択肢の累積選択回数を示したものを示す。(図－10)

午後2時の安定時に実施した「ポット」と「コップ」では、「ポット」を好んで選択した。「コップ」と「トイレ」では、トイレ」を好んだ。

午後1時に繰り上げてからの結果は、「ポット」と「コップ」では「ポット」のみを選択した。「コップ」と「トイレ」では「トイレ」のみを選択した。午後の活動の選択では、セッション8からの「ペットボトル洗い」導入が始まった。各活動に分化的反応が見られない。

午前10時の設定では、「ポット」と「コップ」では、「ポット」を多く選択した。「コップ」と「トイレ」では、「トイレ」のみを選択した。活動の選択では、「外出」が多く選択された。

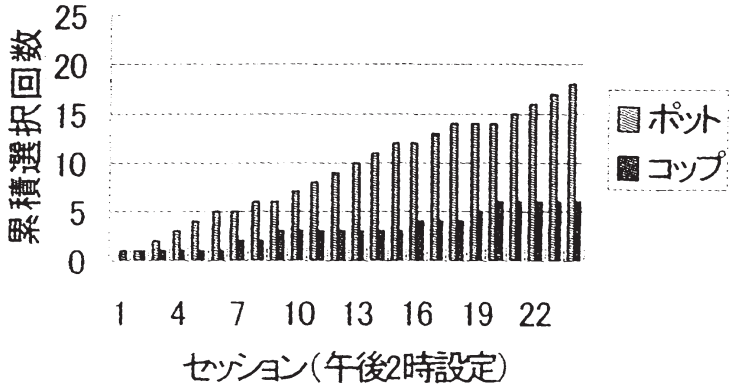
選択肢の提示は、左右に偏ることのないようにランダム提示した。はっきりした分化的反応が見られる条件と、午後の活動選択のように分化的でない反応も示されることからから選択行動が形成されていると判断できる。

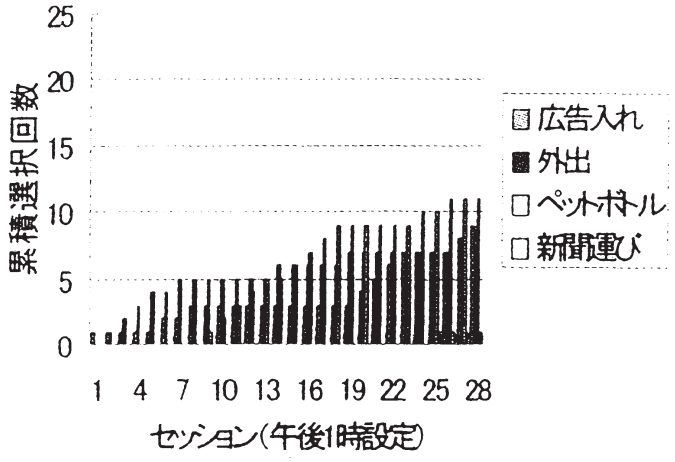
(4) 般化の確認

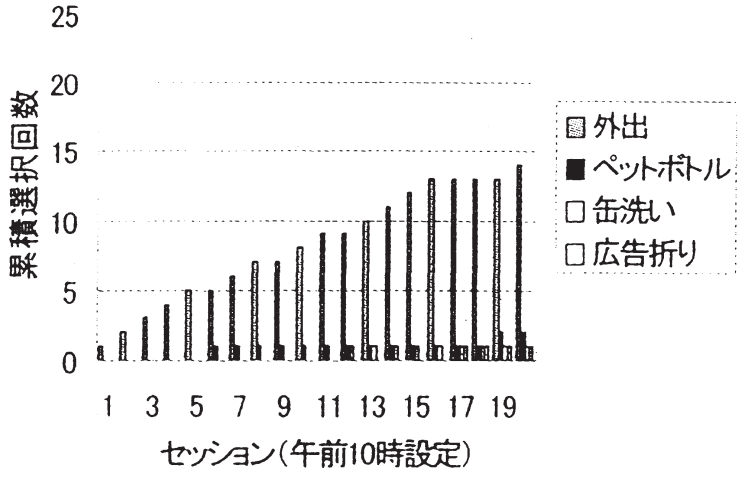
1999年11月9日から12月6日まで、「ペットボトル洗い」の般化を見た。プロンプトを要せず2回の選択が見られた。累積選択回数（図－10）の結果の通り。また、「コップ洗い」は設定後1週間はすべて選択が見られた。しかし、3日間（1990年12月20、21，22日）の欠席後、実施した時「コップ洗い」を選択したが、1個目で洗うことを拒否した。歯科通院後遅刻で通所したこともあり、不安定であったことにもよると思われる。2000年1月5日に選択後1個目で洗うのを拒否したが、6日以降はコップを洗い逃げている。

(5) 潜時から見る時間別介入設定の妥当性

選択設定後から選択までの時間（潜時）を集計した結果、安定時の午後2時以前の設定では、午後1時、午前10時の設定で潜時が長い。このことから時間帯を徐々に安定時から不安定時に移行していく条件の妥当性が窺える。


累積選択回数
25
20
15
10
5
0
1 4 7 10 13 16 19 22
セッション(午後2時設定)
ポット
コップ


累積選択回数
25
20
15
10
5
0
1 4 7 10 13 16 19 22 25 28
セッション(午後1時設定)
広告入れ
外出
ペットボトル
新聞運び


累積選択回数
25
20
15
10
5
0
1 3 5 7 9 11 13 15 17 19
セッション(午前10時設定)
外出
ペットボトル
缶洗い
広告折り

図－10　累積選択回数

4 考 察

本事例では、「好きなこと」として捉えた「こだわり」の3つの行動を選択肢として選択行動を形成した。これによって、周囲から選択が困難と見られている「こだわり」の強い人を対象にして選択行動を形成するひとつの方法を示すことができたと考える。

更に、「経験のある行動」の4つを選択のレパートリーに加えた。この設定で選択行動が成立したのは、既に「こだわり」による選択肢で選択行動が形成されていたことと選択した行動が経験したことのある行動であったためと考えられる。

次に、「こだわり」から関連した「社会化」された行動の2つを選択のレパートリーとして加えた。低減や除去する対象とされる「こだわり」を問題とみなすのではなく、それを利用し、良い受容される行動に転化させることを試みた。結果が示すように、「こだわり」の行動で選択肢を設定したため、「こだわり」の状況に変化はない。しかし、「ペットボトル洗い」や「コップ洗い」というレパートリーの増加は、「社会化」された行動を選択できる機会となった。それは対象者にとって、社会参加の方法の広がりを意味していると考える。このことから、望月(1996)の「選択肢の中から選ぶという単純な行動で社会参加が可能となる」という指摘を支持することができる。

本ケースは、知的障害者更生通所施設内でも最も重度な一人である。問題行動もあり、常に一対一の対応が必要である。コミュニケーションに関して受容と表出にも大きな問題をもっている。対象者に選択肢を提示し、選択させるということは、提示者側としては、対象者に対して「AかBを選択してほしい」という意図を選択肢の提示を通して伝え、他方対象者としては選択肢から選択する行動をもってそれに応じるというコミュニケーションの機能が含まれること（望月、1996）を意味している。つまり、選択の機会設定がひとつの新たなるコミュニケーション手段となっていったと考えられる。

今後、対象者の生活の中に、このような選択の設定を継続し、充実していく意志が引き継いで行く担当者や周囲の人間にあるかが大きな鍵となると思われる。

このような結果を導くことに寄与したこととして次の二点が挙げられる。

まず第一としては、フェイズ5で切り抜いた写真を利用したことが、対象者にとって理解しやすいものとなったと考えられることである。写真を切り抜くことで、行動を象徴する媒体が捉えやすくなったと見られる。また、摘まんで渡してくれるという選択行動を誘発したのは、摘みやすい切り抜いた写真をイミテーションのように使用できたことによると考えられる。

第二としては、対象者の朝の心理的に不安定で新しいことに落ち着いて取り組むことが難しい状態から、時間を経るごとに徐々に安定していくことに着目し、まず心理的に安定して新しいことに取り組みやすい状態の時に選択を設定することからはじめて、徐々に不安定になることが多い時間に選択設定を移して行ったことである。この時間に配慮した設定が妥当であったことは、選択を設定して反応するまでの時間である潜時を見ると証明できる。潜時は、午後2時、午後1時、午前10時を比較すると早い時間帯で選択設定した場合に長くなっている。
このような提示する選択肢の形態や設定時間への配慮は実生活に即してセッションを組んで行くことの利点であると考えられる。

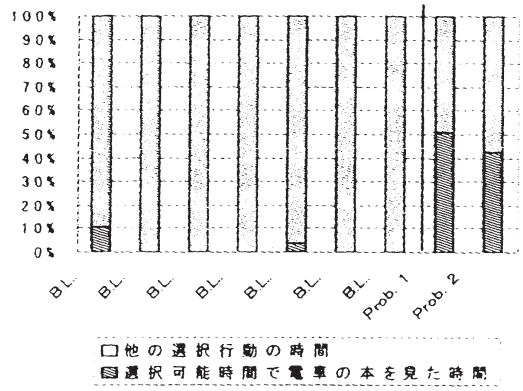
Ⅴ　波及効果

２つの事例について、選択行動形成とレパートリーの増加を試みた後と、介入前の状況とを比較することによって行動の変化を確認したい。具体的には、ベースラインと「好きなこと」を把握するために実施した「１週間24時間の家庭内選択状況調査」と「施設内の行動観察」の結果を、介入後の家庭内と施設内でランダムに選定した２日間に同様な手法で調査と観察を実施した結果とを比較検討する。

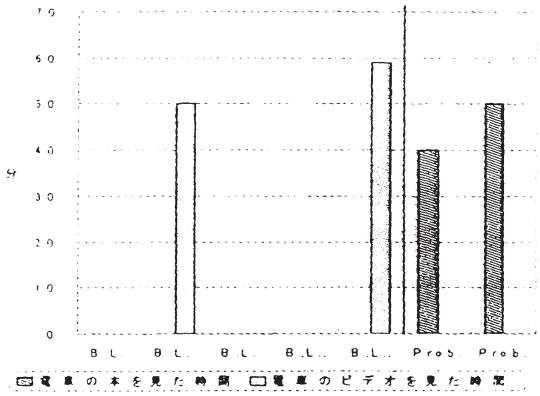
図書館を利用した事例では、図－11にあるようにベースラインでは、家庭内で選択が可能な時間内で実際、「電車の本」を見てはおらず、「電車が好きである」という状況にあった。他の選択可能時間では、表－２にあるような行動を行なっていた。介入後は選択可能時間に占める「電車の本」を見る時間がプローブ１では51％、プローブ２では42.45％となった。見たのは図書館から借りた本である。プローブは記入者の都合で1999年12月21日と22日に実施した。よって、「電車の本」を楽しむ「積極的、自発的な選択による行動」が増加し、「消極的な選択による行動」は減少した結果が得られた。また、図－12は、施設内ではベースラインで「電車の本」は見ていなく、ビデオを見ていたが、プローブでは「電車の本」を見ている時間が増加している。ベースラインで施設にある「電車の本」は、フェイズ１の結果にもあるように「見なれた本」しかなく、関心が向かなかったと考えられる。プローブは、1999年12月24日と27日に実施した。

「こだわり」を選択肢にしたケースでは、図－13にあるように「積極的、自発的な選択による行動」をした時間はベースラインにおいて「水のみ」、「コーヒー入れ」、「体操」であり、時間は僅かであった。プローブでは、それに「缶洗い」、「ペットボトル洗い」が家庭でも行なわれるようになり、時間としては15分、30分であるが増加した。施設内では、図－14にあるようにベースラインでは、選択による活動はなかったが、プローブでは選択の機会設定で選択した行動の時間と置きかえられた。「こだわり」の行動自体は減少しているとはいえない。

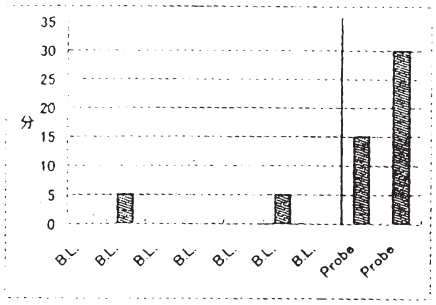
家庭内での「缶洗い」、「ペットボトル洗い」は、保護者に協力を依頼したわけではなく、対象者が自発的に実施した。保護者から、報告を受けて対象者が洗った缶をリサイクルするため受け取った。都内23区では、ごみの弁別回収が更に強化され、資源ごみの回収に関わる家事は重要となる。対象者が家庭で家事の役割を分担できるようになる可能性を示している。



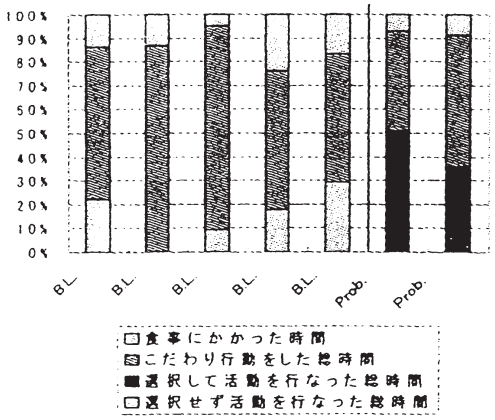
図－11　家庭内における選択可能時間内の「電車の本」を見た時間比



図－12　施設内で「電車のビデオ」と「電車の本」を見た時間



図－13　家庭内での選択行動の変化



図－14　施設内の選択行動の変化

V　総合考察

1　方法の有効性

本研究は、通所施設を利用する重度の知的障害者が、施設の生活の中で「自己選択」することへの支援の方法を検討したものである。具体的には、対象者にとって選択しやすい選択肢で選択行動を形成し、そのレパートリーを増加させ、より多くの種類の選択肢が設定された選択の機会を得ることを狙いとした。結果として、図書館に選択のレパートリー増加を求めた事例では、地域に根ざした（community-based）方法で、達成困難な課題には、図書館職員の働きかけという環境側の援助によって、「電車の本」を楽しむ、しかも図書館にあるさまざまな本を見ることを充実させた。また、「こだわり」行動を繰り返していた事例では、「こだわり」で選択行動を形成し、選択の機会設定とそれへの反応が提示者と対象者とのコミュニケーションの手段ともなり、「ペットボトル洗い」や「コップ洗い」の「こだわり」に関連した社会化された行動がレパートリーとして選択可能になった。

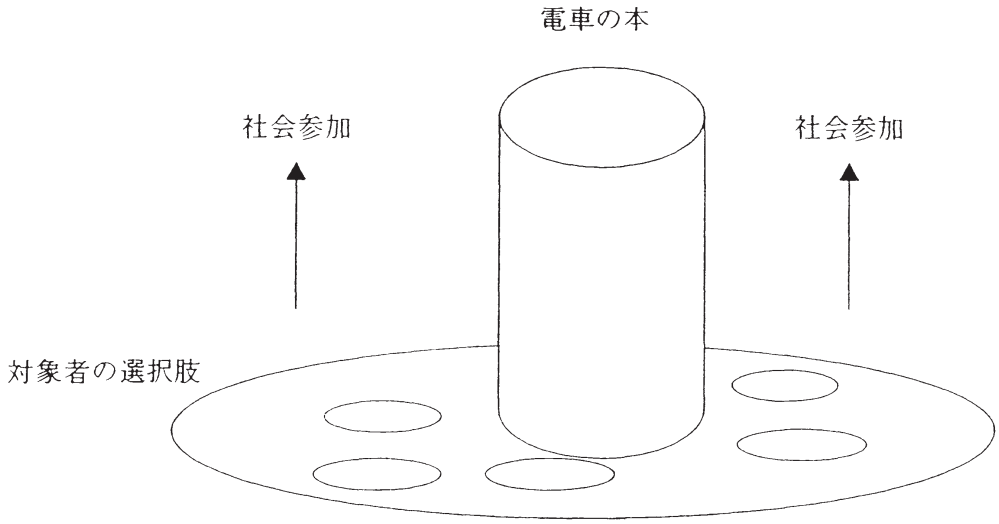
このことから、「自己選択」の重要性が謳われても具体的に支援の方法に欠いていた社会福祉援助技術に、特に今まで選択が困難と見られて「自己選択」という観点からは「今後の課題」のレッテルを貼られてきた重度の対象者に対して、ベースラインの測定、標的行動の決定、課題分析、プロンプトフェイディング法、結果操作など応用行動分析の手法を用いることによって、確かな選択行動の形成とそれを充実させる手段を提示することができた。これをイメージした図を図－15に示す。

これらの結果を導いたのは、ベースラインの測定のために実施した「1週間24時間の家庭内選択状況調査」と「施設内の行動観察」によって把握された対象者の「好きなこと」とそれによる選択設定である。「好きなこと」は、同時に行動の強化子とならないと意味がない。それは、「電車の本」のように一般的に理解できる場合もあるが、「こだわり」でも対象者の「好きなこと」のレパートリーが限られている場合、「こだわり」を個性的な「好きなこと」として把握すれば、行動の強化子となる。このような強化子を選択の機会設定において提示者側がいかに設定するかが選択行動の形成では重要となる。

また、対象者2名は地域で生活しているとはいえ、家庭における監護と施設における処遇という同様な生活環境にある。選択行動を形成し、レパートリーを増加させる方法論の総枠では同様であるが、具体的な手続きと結果は示したとおり、個別的である。図書館を利用した事例では、図書館利用の行動連鎖の形成に、プロンプトフェイディング法と図書館職員の援助という環境からのアプローチが有効であったことを示している。「こだわり」を繰り返した事例では、新しい行動を体験する機会を選択によって得て、言語的また手を叩くという視覚的な賞賛によって行動が強化され、社会化された行動の選択が可能になった。これを三項随伴性に照らし合わせると、選択肢が先行刺激となり、選択後選んだことができるという正の強化子が後続刺激となることでその選択行動が強化されること、また選択した社会化された行動を正の強化子によって強化することでレパートリーが増加することを示していると判断できる。

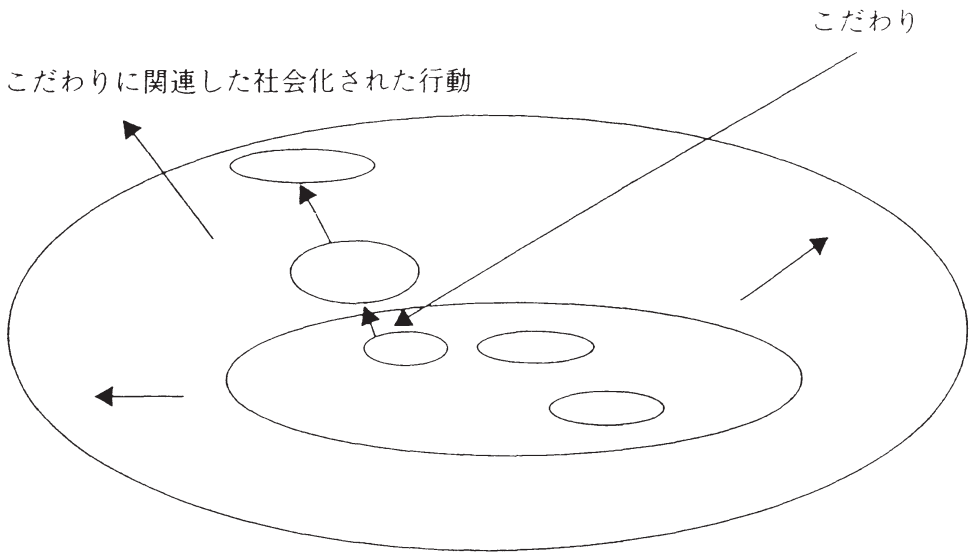
1）好みのカテゴリーから新奇性のある選択肢を選択できる事例

選択行動を形成し、地域図書館利用という社会参加を通じて選択のレパートリーを増加させる。



2）こだわりのため選択肢からの選択が困難であった事例

選択行動形成を通じてこだわりから社会化された行動を選択できるようになる。



図－15　図で示した選択のレパートリーの増加のイメージ

見方によっては、このような方法は、施設サイドのマンパワーがないこと実施困難であるとの批判を受けるかもしれない。しかし、図書館を利用する事例では、施設のメニューである「散歩」のコースの中で実施し、集団で利用した。夏は暑い中一時の涼しさを得ることもできたし、「こだわり」の事例の対象者も「散歩」として参加した。「こだわり」の事例の対象者も元々常時職員が一対一でついているケースであるので、このような方法を実施するのに特別な配慮は要さなかった。つまり、マンパワーという観点からの問題もなかったといえる。

2　重度の知的障害者にとっての「自己選択」

本研究は、「自己選択」を支援することが、「生活の質」（ＱＯＬ）を高めることに「寄与する」と考えて研究を進めた。「図書館を利用した事例」では、「選択行動」を社会資源の利用を通じて追究した。それによって、波及効果に示したように「本を見る時間」が増え、無為に過ごしている時間が減少したのであるから「寄与した」と言うことはできるであろう。同様に、「こだわり」の事例では、「選択」という手段にコミュニケーションの機能があることが確認され、また波及効果に示したように自発的に新しい選択のレパートリーに取り組むようになったことから、「寄与した」と言えると考えられる。しかし、いずれの事例においても、選択によって「生活の質」（ＱＯＬ）を高めることに寄与できたかは、「生活の質」（ＱＯＬ）の捉え方が明確でない現在、対象者本人に確かめでもしない限り本当のところはわからないであろう。

いずれにしても、事例の結果が示すように、「自己選択」に応用行動分析学の手法を用いることで、「自己選択」できることを支援する、つまりエンパワーメントする方法を示すことができたと考える。

謝　辞

この報告は、筑波大学大学院教育研究科カウンセリング専攻リハビリテーションコース修士論文に基づき、また日本発達障害学会第35回研究大会および日本行動分析学会第18回年次大会において発表したものに加筆したものです。本研究をまとめるにあたり、ご懇篤なご指導、ご助言を賜りました、筑波大学教授の篠原吉徳先生に衷心より感謝申し上げます。

参考文献

1）アルバート，P.A、トルートマン，A.C.、佐久間徹他訳『はじめての応用行動分析』二瓶社、1998

2）Bambara, L. M., Koger, F., Katzer, T. & Davenport, T. A. (1995). Embedding chioce in the context of daily routines : An experimental case study. Journal of the Association for Persons with Severe Handicaps, 20, 185-195

3）バーローD. H. & ハーセンM著、高木俊一郎、佐久間徹監訳『一事例の実験デザイン ― ケーススタディの基本と応用 ―』二瓶社、1997

4）Cooper, K. J. & Browder, D. M. (1998). Enhancing choice and participation for adults with severe disabilities in communitiy-based instruction, Journal of the Association for persons with Severe Handicaps, 23, 252-260

5）Dattilo, J & Rusch, F. A. (1985). Effects of choice on leisure participation for persons with severe handicaps. Journal

of the Association for Persons with Severe Handicaps, 10, 194-199.
6) Guess, D., Benson, H. A. & Siegel-Causey, E, (1985). Concepts and issues related to choice-making and autonomy among persons with severe disabilities. Journal of the Association for Persons with Severe Handicaps, 10, 79-86
7) 久田則夫『施設職員実践マニュアル』学苑社、1996
8) ホーナー，R他編、小林重雄監訳『自閉症、発達障害者の社会参加をめざして ― 応用行動分析学からのアプローチ ―』二瓶社、1998
9) 加藤哲文「学校教育現場における選択行動形成の意義：山田論文へのコメント」行動分析学研究Vol.8. 22-25、1995
10) 金子尚弘「選択行動の獲得プログラムを通して行動分析の基本を考える：山田論文へのコメント」行動分析学研究 Vol.8. 26-28
11) 北沢清司「心身障害児(者)福祉におけるマンパワーに関する研究」『平成５年度厚生省心身障害研究報告書心身障害児(者)福祉施設のあり方に関する総合的研究』129 － 152、1994
12) 小林重雄監修、山本淳一他著『応用行動分学析入門』学苑社、1997
13) 小林重雄監修『発達障害の理解と援助』コレール社、1999
14) 槇場政晴、藤田継道、井上雅彦「最重度知的障害児における選択行動の形成に関する基礎研究［１］ ― Rett症候群児の注視行動の評定 ―」日本特殊教育学会第30回大会発表論文集、470-471、1994
15) 松岡勝彦、小林重雄他「発達障害者における所持金内での買い物指導」特殊教育研究37(3)、1999
16) 望月昭「「行動福祉」という立場は成立するであろうか ― 障害児者福祉の研究・実践のパラダイムとして ― 行動科学、32(2)56-59、1993
17) 望月昭「選択を主とした障害者のコミュニケーション：最重度の人の要求をどう受けとめるか」第22回日本脳性麻痺研究会講演集、1995
18) 望月昭「発達障害リハビリテーションの実践・研究について：自己決定の援助技術を中心に」発達障害研究第17巻4号279-282、1996
19) 森田浩正、野崎和子、望月昭「重度の知的障害を持つ人の活動選択」日本特殊教育学会第30回大会発表論文集、298-299、1992
20) 中野敏子「知的障害のある人たちへの援助活動：ソーシャルワーク研究動向と課題」発達障害研究第20巻第１号　1998年
21) 野崎和子、望月昭、角田玉青、森田浩正「重度精神遅滞者のＱＯＬ向上の一手段としての選択機会と測定 ― Ｙさんは、何をしたいのですか？ ―」日本社会福祉学会第39回大会報告要旨集、360 － 361、1991
22) 野崎和子、望月昭「重度の知的障害を持つ人の活動選択 ― その２日常で選択とフォローアップ ―」日本特殊教育学会第31回大会発表論文集，244-245、1993
23) 野崎和子、望月昭「精神遅滞者のＱＯＬ向上の援助手段としての選択スキル ― オヤツのプリファレンスに関する予備実験 ―」、1993
24) Nozaki, k, &, Mochizuki, A. (1995). Assessing choice-making of a person with profoundly disabilities:a preliminary analysis. Journal of the Association for persons wish Severe Handicaps, 20, 196-201
25) 織田智志・鵜飼和江「福祉施設におけるＰＥモデルをもとにしたＱＯＬ向上の実践とその継続的な提供 ― 重度の知的障害をもち強度行動障害といわれる人のＱＯＬ向上 ― 第17回行動分析学会大会紀要、1999
26) Parsons, M. B., & Reid, D. H. (1990). Assessing food preferences among persons with profound mental retardation: Providing opportunities to make choices. Journal of Applied Behavior Analysis, 23, 183-195
27) レミントン，B編著、小林重雄監訳『重度知的障害への挑戦』二瓶社、1999
28) リチャード・W・マロット、マリア・E・マロット：杉山尚子他訳『行動分析入門』産業図書、1998
29) 佐藤久夫『国際セミナー：世界の障害者福祉の動向、地域福祉のとりくみ』日本障害者リハビリテーション協会、1999